

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	やまもと たつや 山本 達也	所属・職名 GCOE 短時間研究員
e-mail	tatsuya1224@hotmail.com	
発表題名 (英語)	Performing Tibetan Traditions as a Social Movement in Postcolonial India	
著者名	Yamamoto, Tatsuya	
会議名 (英語)	The Joint Conference of AAS and ICAS	
開催地(国、市)	U. S. A, Honolulu	
参加期間	2011年 3月 31日 ~ 4月 3日	
<p>本発表は、植民地統治以降のインドにおける社会運動にさまざまな角度から焦点を当てたパネルセッションの一部を構成するものである。特徴としては、他の発表者がインド国民に焦点を当てていたのに対し、発表者は難民として生活し、インド国民にならないでいるチベット人の活動を描きだしたこと、また、社会運動の一環として彼らの芸能活動に焦点を当てたことが挙げられる。90年代以降活発化している芸能集団によるインド国内での公演活動を軸に、いかにチベット人たちがインド人たちのあいだに存在の認知を獲得し、また、インド人から財政面での支援を獲得しようとしているのかという活動を明らかにし、そうした活動が90年代以降の、アイデンティティ・ポリティクスに依拠したインドの社会運動と連続性をもつものではないか、という仮説を提示した。しかし、本発表でも明らかにしたように、彼らの活動は万事がうまくいっているわけではなく、エリート層を観客として対象としているがゆえに、日常的に接点をもっているエリート以外のインド人たちのあいだに良好な関係性を築くことができているとは言い難いものがある。こうした点を踏まえて、本発表はチベット難民のひびとがおこなう社会運動の成功点失敗点を描きだした。</p> <p>会場には多くのインド人聴衆が詰めかけていた。具体的な問いとしては、いかなる公演戦略が用いられているのか、グローバル化に焦点をあてるべきではないのか、という二つの質問があった。前者に関しては、海外公演との差異を明確にし、どのような工夫がなされているのかを答えた。後者に関しては、これまでのチベット難民研究は難民社会対西洋という二項対立の枠組みで語る傾向があり、ホスト国であるインドの重要性が看過されていること、難民社会に起こっていることは、グローバルレベルでの現象とローカルレベルでの現象が結合した結果であるため、双方を考慮に入れることが重要なのである、と回答した。</p>		

学会発表渡航支援報告書

